

箱庭と描画の空間配置についての一考察

The Spatial Differences between Sand Play Therapy and Drawing-Tests

城 倉 登代子

Toyoko JOUKURA

（平成20年10月6日受理）

The unconsciousness is understood by using Sand Play Therapy and Drawing-test. There is the point of similarity between Sand Play Therapy and Drawing-test. In this research, as far as measuring the size of vacant spaces, there aren't any clear differences between both methods. The reason why is Sand Play Therapy takes the way of using testee's sense of touch, on the other hand Drawing-test takes the way of using his sense of sight.

I. はじめに

箱庭療法は砂箱を用いて、その中にミニチュアを置いて表現をすることで治療する臨床心理学の方法である。臨床心理学の治療法の中で、表現を用いるものは描画療法あるいは描画テストとしても存在する。では箱庭のように玩具を実際に置いて三次元の表現が可能なものと、描画のように二次元の絵として表現するものに違いはあるのだろうか。

箱庭でもよく置かれる木や人の描画を求める技法は、風景構成法である。そこで箱庭と風景構成法の違いから、両者について研究したものと井原（1993）がある。風景構成法の教示で箱庭制作をして、表現内容やイメージ分析から両者の違いを検討するものである。そこにおいては三次元である箱庭の、事実とイメージ表現の世界の近さが箱庭の治療的側面であると述べられている。

さて箱庭にも、図1のようなバウムテストでも使われる空間象徴の考え方が対応するとされている（木村、1985）。ただこのヨーロッパの考え方を日本でそのままあてはめるのは危険だともされており（河合、1969）、意見の一致が見られていない。また岡田（1984）は、箱庭の左右差についての研究を行なっている。つまり、作者の内界とされる左側と外界である右側についての違いである。正と逆位置での箱庭作品の写真を対象者に比較してもらった実験の結論として、概ね左右の区別がつかないとされている。

けれども初回の箱庭作品には、「クライアントの人格が相当広く統合的に示される」（荒木、2002）。そこで箱庭にも広い意味での芸術療法の一つとして、投影法の描画テストと同じく被

験者のパーソナリティ傾向を見つけるのに役立つ部分もあるのではないかと筆者は考える。

箱庭の作品を考える際には、置かれたアイテムについて見ることが多い。しかしながらインクの染みに投影されたものを分析する心理テストであるロールシャッハテストでは、何も描かれていない空白部分をどう意味づけるかも重要である。それと同様に箱庭においては何も置かれていない領域や絵で何も描かれていない部分にこそ、被験者のパーソナリティーにおいてまだ開発されていない領域といった意味が存在するかもしれない。

本研究では空白の領域を比較することで、空間配置という観点から箱庭と描画の違いについて考えていきたい。空間象徴の中でも、個人の空白の領域は箱庭と描画で共通しているという仮説について見ていくこととする。

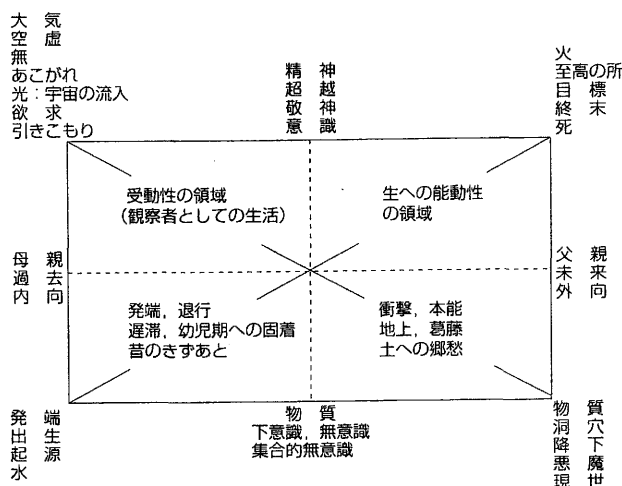


図1. Bolander, K. (1999) より Grünwaldの空間の図式 (pp.83)

II. 方法

1. 実験

実験は1997年に男女大学生及び大学院生8名を対象に、相談室において個別に実施した。A4のケント紙に「実のなる木を一本描いて下さい。」という教示で、鉛筆と消しゴムを用いて行なった。次に箱庭は57×72×7cmの砂箱の箱庭療法用具を用いて、「この砂と玩具を使って何か作ってみて下さい。」と教示した。

どちらにおいても、筆者が実験者として受容的に立ち会った。制作時間は自由である。

2. 分析

箱庭ではアイテムが置かれたり砂が掘られたりしていない、作品において未使用の領域を写真に5mm四方の正方形が入るかどうかで面積を求めた。バウム画においても同様に、1cm四方の正方形で白紙の部分の面積を求めた。作品を上下左右で図1の空間図式に従って4つに分割し、空白が最も多い領域と少ない領域が箱庭とバウム画で同じであるかどうかを個人ごとに比較した。

Ⅲ. 結果

表1にあるようにバウム画と箱庭で最も使用されなかった領域、最も使用された領域が共に一致したものが2例、片方のみが3例、両方とも不一致が3例であった。直接確率計算法によると、 $p=.486$ （両側検定）で有意でなかった。両者の空間がより残っている領域が左右どちらかで一致するかの比較においても、有意差はなかった。

表1. バウム画と箱庭の空白の領域 n.s.

		最小領域		
		一致	不一致	合計
最大領域	一致	2	1	3
	不一致	2	3	5
	合計	4	4	8

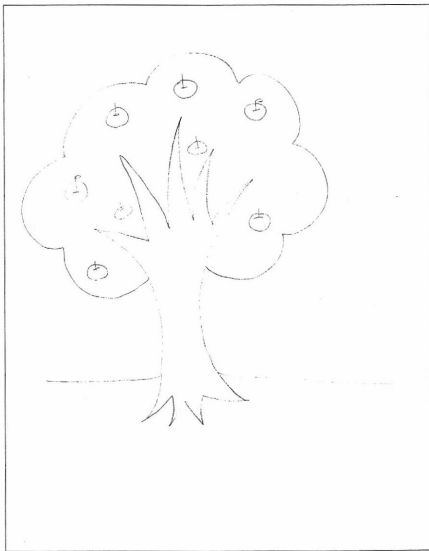


図2. 領域一致事例のバウム画

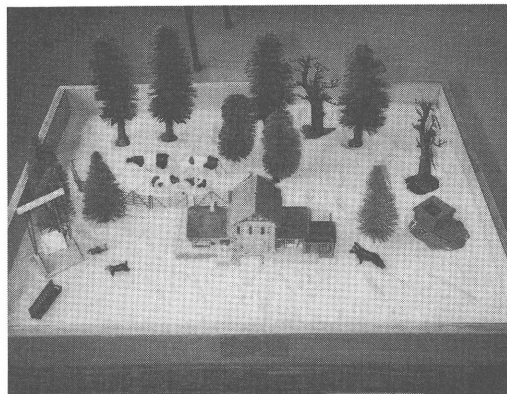


図3. 箱庭作品

最も使用されなかった領域と、最も使用された領域がバウム画と箱庭で共に一致していたケースを図2、3として呈示した。このケースのバウム画はややサイズが小さめであり、位置は左上方の受動性の領域に偏っている。静かであるが、まとまった描画である。一方箱庭では「ヨーロッパの片田舎」を作ったとした。右下方には空間が残っており、アイテムも左上方に多く用いられている。下側の無意識や本能といった領域は、触れられることなく残っている作品である。

さらに、バウム画全体の空間領域が少ない群と多い群それぞれ4ケースに分けて箱庭全体の空間の比較を行なった。結果は有意ではないが ($t(6) = 1.20, p > .10$)、それぞれバウム画の白い空間が少ない群は箱庭の空間の大きさが23.75 (SD=24.78)、多い群は39.00 (SD=5.48) であった。

IV. 考察

両者に全く関係が見られなかったことについて、以下のことが考えられる。

第一に、二次元の描画と三次元の表現である箱庭をただ同じ空間図式に当てはめることには無理があろう。バウム画は木を描く為に用紙の中心部分は埋まって、必然端は空く。一方で箱庭は、砂箱の端も含めて様々な領域が用いられる。中心に玩具が置かれるのは、マンダラ表現など特殊な例である。その両者の違いをふまえることなく、空間領域を並行して考えることは問題であった。皆藤（1994）においても、領域についての「共通理解は得られていない」とされている。

また作品の上方への身体運動や感覚は、両者に共通しているのではないかと筆者は考えていた。つまり上方の精神世界へ開かれていないと、そのような動きはし難いということである。しかしながら箱庭では玩具を置くという行為には触覚が、そして作品から受ける印象は視覚を通してである。描画においては描くのは行為であるが、作品を見るという点で視覚を用いるだけである。用いる感覚の決定的な違いが両者にはあり、同じ身体感覚ということにはならなかったようである。箱庭は上方には手が届き難いが、砂箱の周りを歩いて自分の立つ位置を変えてしまうと空間象徴の意味も変わって来ってしまう。さらに描画においては、画用紙のどの位置でも自分の視界の中や伸ばさなくとも手の届く範囲に簡単に収まるものでもあった。

本研究において砂に明らかな造形が残っている川などは、空間とはしなかった。しかしながら玩具を置き換えた故に付いた跡なのか、判断に迷う部分もあった。川岸（2007）にあるように、「完成した箱庭作品が提示されることが多いが、実際は完成に至るまでの制作者の逡巡や、箱庭に置かれたものの移動などの動きを把握しておくことが重要（pp.420）」とされる。何を以って、被験者のパーソナリティの中で開発されていない空白領域と理解するのも方法論的な問題があったかもしれない。

さて筆者は箱庭において砂を用いることが被験者に精神的安定をもたらすことを、実験前後でのバウム画の変化から確認している（山口、2005）。それを考慮するとテストである描画と違って、箱庭は診断的な側面ではなくてシリーズとしての治療的な側面を考えていくことがより重要なのであろう。

また今回は箱庭制作の前に、母子画も描いてもらった。そこでの「幼いときのあなたとおかあさんの関係をイメージして自由に絵に描いてください」という教示から、箱庭に取り組む際にも回顧的な要素が強かったと考えられる。その影響が作品構成に与えたものも、大きかったのであろう。

V. おわりに

人間の身体の特徴として、自分から遠く離れた方は手の届かない、つまり精神の領域である。この考え方は、対象が平面であっても立体であっても同じだろうと筆者は考えていた。しかし身体とイメージは、そう単純な図式ではないと本研究において分かった。さらに身体性について、考えていきたい。

またケースの数も少ないので、細かな統計的な違いを見出すことに困難もあった。個人内の差はなくとも、個人間の違いには少なくとも意味がありそうである。今後は細かい領域ではな

く、全体の印象についてもケースを重ねて見ていきたいと考えている。

本研究は、稲盛財団の助成によるものである。

<文献>

- 荒木ひさ子 2002 初回箱庭とその後の展開 (岡田康伸・編) 箱庭療法の現代的意義 至文堂 pp.200
- 井原彩 1993 風景構成法と箱庭における空間の表現の特徴について 箱庭療法学研究 6巻2号 38-49
- 皆藤章 1994 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房 pp.29
- Karen Bolander (高橋依子・訳) 1999 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版 pp.83
- 河合隼雄 1969 箱庭療法入門 誠信書房
- 河合隼雄、中村雄二郎 1993 トポスの知 箱庭療法の世界 TBSブリタニカ
- 川崎克哲 2007 箱庭療法の「力動性」について—風景構成法、夢と比較しつつ (岡田康伸・皆藤章・田中康裕 編) 箱庭療法の事例と展開 創元社 pp.420
- 木村晴子 1985 箱庭療法—基礎的研究と実践 創元社
- Koch,C. (林勝造・訳) 1970 バウムテスト—樹木画による人格診断法 日本文化科学社
- 岡田康伸 1984 箱庭療法の基礎 誠信書房
- 山口登代子 2005 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇) 55号 227-234
- やまだようこ 1988 私をつつむ母なるもの 有斐閣